

# NIE クラスにおけるイベント時の生徒のやる気度の考察 － Before / After 型やる気度調査法を用いて－

横山 宏\* 増尾美恵子\*\*

A Study of Students' Yaruki Degree at School Festival in the NIE Classes  
－ Based on Before/After Type Yaruki Degree survey method －

Hiroshi YOKOYAMA\* Mieko MASUO\*\*

キーワード：NIE, 総合的な学習の時間, やる気度調査, PDS, 授業支援

## 要旨

本稿では、筆者の一人が勤務するSIS中等部・高等部のNIEクラス（総合的な学習の時間も意識した授業展開を実践しているクラス）の生徒について、学校行事（学園祭）に取り組んだことで起きるやる気の変化の特徴を把握するために、2016年度と2017年度の2ヶ年にわたり調査した結果を報告する。ここで用いた調査手法は、筆者らが所属するやる気研究会（任意団体）が開発したPDS（Plan-Do-See）型のやる気度調査法（Before / After型調査法）で、これはイベント（行事）の前とイベントの後でのやる気の度合いを「Yes / No」で回答させるものであり、授業の合間に実施するには、時間的にも心理的にも生徒への負担が極めて少ない方法である。

## 1. はじめに

学習指導要領の総則「教育課程編成の一般方針」を見るまでもなく、学力のひとつとして認知されている「学習意欲」を探求することは、指導者の責務である。そこで、本研究は、生徒の「やる気度」に着目し、それらを数値的な傾向で捉えることによって、授業支援に活かそうとするものである。

今回、筆者らは、所属する「やる気研究会」<sup>1)2)3)</sup>が開発した「やる気度テスト」に中学・高校でも使える工夫（到達点の記号化など）を施し、「Before / After型やる気度調査法」として発展させ<sup>4)5)</sup>、それを用いて調査し、得られたデータの特徴把握に取り組んだものである。

「Before / After型やる気度調査法」は、イベント（学校行事・課外活動）に参加する前（Before）と後（After）に、Plan-Do-See(PDS)型の質問に「Yes / No」で矢印に従い回答させるというものである。これによって、PDS型に対応したやる気度を把握することができる。中学校・高校の生徒にとってのイベントは、学習指導要領<sup>6)</sup>にもあるように、学校行事を通して望

\* 大阪電気通信大学 総合情報学部 デジタルゲーム学科

\*\* 関西学院大学千里国際中等部・高等部 社会科

ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してより良い学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てることが目標である。また、内容においては全校または学年を単位とし、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行なうこととなっている。その中でも文化的行事の位置づけは平素の学習の成果を発表し、その向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするような活動を行なうことであるとされており、それらの趣旨に添い、やる気度のデータを考察することで、被験者となったSIS中等部・高等部の教育活動の支援に活かせるのではないかと考えたものである。

対象とした生徒は、調査時期にNIEを受講しているクラスとした。NIEを受講しているクラスは、総合的な学習の時間の教育目標と合致した学習を行なっているものと理解されている<sup>6)</sup>。それは、先の学習指導要領の改定で、総合的な学習の時間の目標に新たに追加された文言「探求的な学習」が、「自ら課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」というものであり、これはNIEが目指すものと合致しているからである。また、総合的な学習の時間の目標には「協同的に取り組む態度の育成」も盛り込まれ、これは新聞記事を材料にしたグループディスカッション、新聞作りの際の編集会議などのNIEと重なる取り組みであり、結果として、総合的な学習の時間は「NIEがやりやすくなった時間」とであるという解説がある<sup>6)</sup>。このようなNIEを受講しているクラスの「やる気度」調査も副次的なねらいとしている。

科目名	NIE (Newspaper in Education) 春 秋冬 学期	担当者	増尾 美恵子
年度	2017年度 (2016年度もほぼ同内容)	対象学年	9年1組～4組
授業時間	年間通して各学期 週1時間		
授業内容	授業中のディスカッションやプレゼンテーションを通して、新聞を中心に世界理解を促して多様な意見を知ること、情報を処理する能力を養う。学年末にはテストもある。 NIEは、学校などで新聞を教材として活用するもので、NIE新聞力(5W1H読解力、集中力)を多いに利用して扱う。素材は最新の時事などである。 *春学期は新聞コンクールへの応募をめざす。毎週の授業時に各自が1新聞をもってきては、グループでのディスカッションのなか自己理解・他者理解を深める。		
到達目標	1. 第8回いっしょに読もう新聞コンクールへ応募する。 2. 新聞を読むことで教科の枠を超え、横断的・総合的な学習、課題解決・探求的な学習の充実を図る。 3. 資料を選択し活用する学習活動を重視するとともに、作業的、体験的な学習の充実を図るようにする。 4. 新聞を通して個々の学習へのやる気度(モチベーション)向上をめざす。		
準備学習	*常に新聞などマスメディアを通して社会に関心を持ち、広く情報を収集しておくこと。 *新聞などに親しみながら家族との対話を深め、コミュニケーション力を身につけておくこと。		

## 2. 研究方法

### 2.1 Before / After型やる気度調査法

筆者が所属する「やる気研究会」は、1983年(昭和58年)に産学協同でスタートし、「やる気の調査方法」としての“IGF法”、“MF法”、“V法”、「やる気度調査法」、「価値観調査法」、「やる気のタイプを知る調査法」などを用いて、やる気の記録を科学的に研究することをめざして活動している任意の研究団体である。

同研究会ではこれまでに、「やる気の自己管理」、「やる気の重連モデル」、「やる気の3番説」、「やる気の満足度シート」などを発案・提唱・実践し、方法の定着を図ってきた。これらの内容は、学術論文の他に、3冊の著書も刊行されている<sup>1)~3)</sup>。

やる気研究会で開発した「Before / After型やる気度調査法」とは、イベントに参加する前

に実施する「Before時やる気度調査用紙」と、イベントに参加した後で実施する「After時やる気度調査用紙」で構成されている。この調査法は、イベントに参加することで心の中に何かが起こり、そのことによる個々の計画的に何かを行なおうとする心理的要因が起こることで、その後におけるPDSを把握することができる調査法と捉えることができる。

図1にBefore時やる気度調査用紙を、図2にAfter時やる気度調査用紙を示す。ここでは、質問に順次Yes / Noで回答してゆき、出口（名義的な結果A～N）に到達し、この到達点に対して、それぞれのコメントを提供するようになっている（決めた目標に向かって、計画を立て、計画に従って実行し、実行したら反省し、不十分なところや改善すべきところは手直しを考え、目標達成をするようにしましょう、など）。

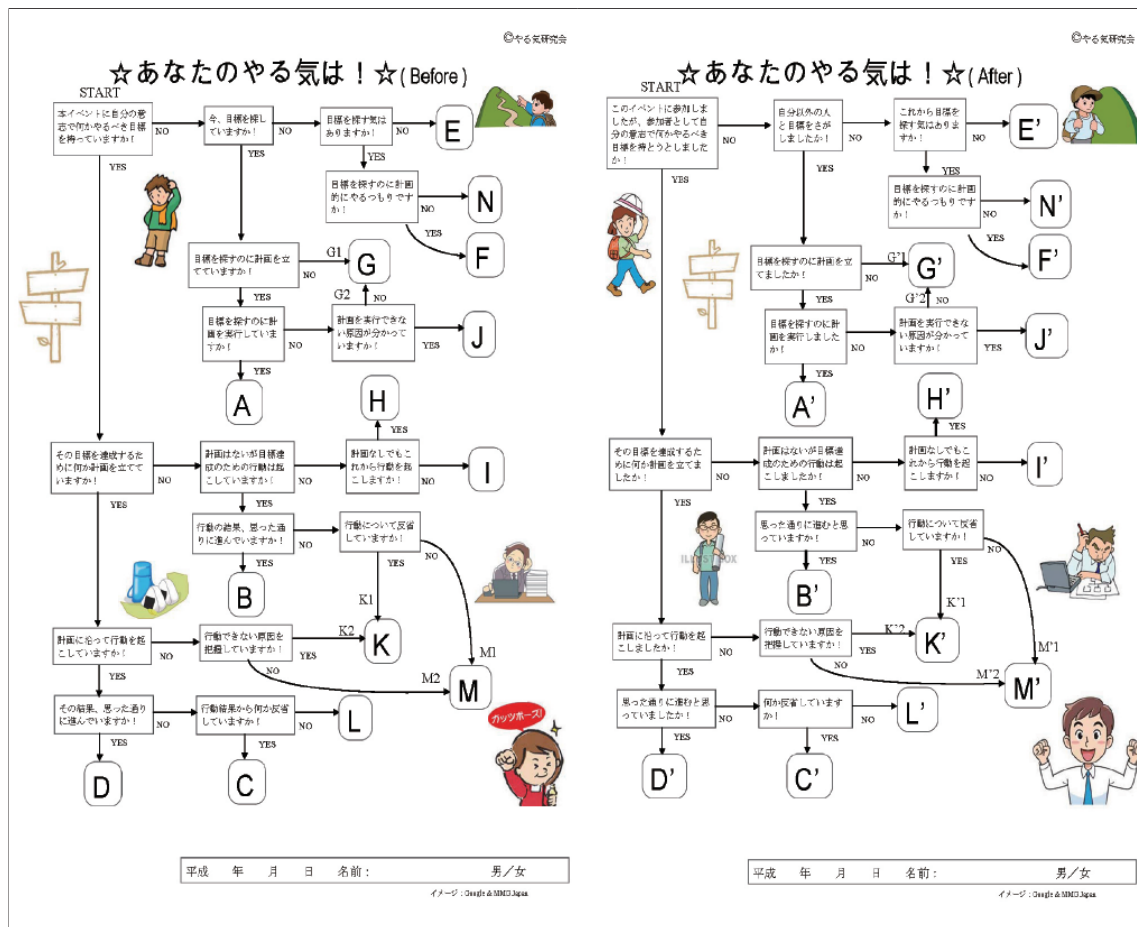


図1 Before時やる気度調査用紙

図2 After時やる気度調査用紙

## 2.2 調査対象者

SIS中等部・高等部の2016年と2017年の調査対象者を以下に示す。

○2016年春学期の調査日と調査対象者

Before時調査：2016年5月23日～27日      After時調査：2016年5月30日～6月3日  
 中等部（9年生：中学3年生）      NIEクラス（9年1組～4組，80名）

○2017年春学期の調査日と調査対象者

Before時調査：2017年5月19日～24日      After時調査：2017年5月29日～6月2日

中等部（9年生：中学3年生）

NIEクラス（9年1組～4組，76名）

本研究における調査の結果は「やる気」を把握する研究のためにのみ使用し，調査結果については，名前は出ないことを説明し，内容においては数量的分析を行なったうえで，今後の教育活動に活かすことが目的であり，提出は任意であることを付け加えて実施した。

表1 2016年度の集計データ

クラス	No.	個人ID	Before時		After時		点数による差
			到達点	点数化	到達点	点数化	
9年1組	1	16-SK20	C	9	K'1	8	-1
	2	16-SK21	K	8	K'	8	0
	3	16-SK22	K2	8	B'	9	1
	4	16-SK23	C	9	C'	9	0
	5	16-SK24	C	9	K'	8	-1
	6	16-SK25	C	9	K'	8	-1
	7	16-SK26	G	3	N'	1	-2
	8	16-SK27	C	9	D'	10	1
	9	16-SK28	G1	3	K'1	8	5
	10	16-SK29	M2	7	K'	8	1
9年2組	11	16-SK30	B	9	K'	8	-1
	12	16-SK32	K	8	K'1	8	0
	13	16-SK33	C	9	K'2	8	-1
	14	16-SK34	D	10	K'1	8	-2
	15	16-SK35	J	4	D'	10	6
	16	16-SK36	G	3	M'	7	4
	17	16-SK37	K2	8	C'	9	1
	18	16-SK38	C	9	C'	9	0
	19	16-SK39	D	10	D'	10	0
	20	16-SK40	C	9	K'	8	-1
9年3組	21	16-SK41	C	9	E'	0	-9
	22	16-SK42	C	9	K'	8	-1
	23	16-SK43	G	3	K'	8	5
	24	16-SK44	N	1	E'	0	-1
	25	16-SK45	D	10	D'	10	0
	26	16-SK46	J	4	K'2	8	4
	27	16-SK47	C	9	D'	10	1
	28	16-SK48	G	3	K'	8	5
	29	16-SK49	I	5	I'	5	0
	30	16-SK50	G	3	K'	8	5
9年4組	31	16-SK52	K	8	I'	5	-3
	32	16-SK53	C	9	H'	6	-3
	33	16-SK54	C	9	K'1	8	-1
	34	16-SK55	K	8	F'	2	-6
	35	16-SK56	K2	8	K'2	8	0
	36	16-SK57	D	10	G'1	3	-7
	37	16-SK01	I	5	K'2	8	3
	38	16-SK02	B	9	D'	10	1
	39	16-SK03	D	10	C'	9	-1
	40	16-SK04	K	8	K'	8	0
9年1組	41	16-SK05	K2	8	H'	6	-2
	42	16-SK06	G1	3	C'	9	6
	43	16-SK07	H	6	D'	10	4
	44	16-SK08	C	9	C'	9	0
	45	16-SK09	D	10	D'	10	0
	46	16-SK10	M	7	K'	8	1
	47	16-SK11	K1	8	B'	9	1
	48	16-SK12	M	7	K'	8	1
	49	16-SK13	K1	8	B'	9	1
	50	16-SK14	B	9	B'	9	0
9年2組	51	16-SK15	B	9	J'	4	-5
	52	16-SK16	M1	7	H'	6	-1
	53	16-SK17	K1	8	C'	9	1
	54	16-SK18	B	9	H'	6	-3
	55	16-SK19	M2	7	K'2	8	1
	56	16-SK60	K	8	K'	8	0
	57	16-SK61	A	5	C'	9	4
	58	16-SK62	K	8	K'	8	0
	59	16-SK63	K2	8	K'2	8	0
	60	16-SK64	K1	8	K'2	8	0
9年3組	61	16-SK65	A	5	C'	9	4
	62	16-SK66	M	7	H'	6	-1
	63	16-SK67	C	9	C'	9	0
	64	16-SK68	K2	8	K'2	8	0
	65	16-SK69	K	8	C'	9	1
	66	16-SK70	K	8	H'	6	-2
	67	16-SK71	K2	8	K'	8	0
	68	16-SK72	E	0	K'	8	8
	69	16-SK73	K	8	K'	8	0
	70	16-SK74	C	9	C'	9	0
9年4組	71	16-SK75	K2	8	J'	4	-4
	72	16-SK76	G	3	K'	8	5

表2 2017年度の集計データ

クラス	No.	個人ID	Before時		After時		点数による差
			到達点	点数化	到達点	点数化	
9年1組	1	17-SK01	N	1	N'	1	0
	2	17-SK02	B	9	M1	7	-2
	3	17-SK03	G1	3	B'	9	6
	4	17-SK04	B	9	F'	2	-7
	5	17-SK05	G1	3	D'	10	7
	6	17-SK06	K2	8	D'	10	2
	7	17-SK07	K2	8	A'	5	-3
	8	17-SK08	B	9	C'	9	0
	9	17-SK09	K2	8	C'	9	1
	10	17-SK10	H	6	M2	7	1
9年2組	11	17-SK11	G1	3	B'	9	6
	12	17-SK12	D	10	D'	10	0
	13	17-SK13	B	9	C'	9	0
	14	17-SK14	D	10	C'	9	-1
	15	17-SK15	D	10	B'	9	-1
	16	17-SK16	A	5	D'	10	5
	17	17-SK17	A	5	I'	8	3
	18	17-SK18	B	9	I'	5	-4
	19	17-SK19	G1	3	B'	9	6
	20	17-SK21	N	1	K'1	8	7
9年3組	21	17-SK22	B	9	H'	6	-3
	22	17-SK23	D	10	B'	9	-1
	23	17-SK24	A	5	F'	2	-3
	24	17-SK25	D	10	L'	8	-2
	25	17-SK26	B	9	B'	9	0
	26	17-SK27	C	9	K'1	8	-1
	27	17-SK28	B	9	K'2	8	-1
	28	17-SK29	D	10	B'	9	-1
	29	17-SK30	C	9	F'	2	-7
	30	17-SK31	G2	3	M1	7	4
9年4組	31	17-SK32	A	5	C'	9	4
	32	17-SK33	C	9	K'2	8	-1
	33	17-SK34	H	6	I'	8	2
	34	17-SK36	B	9	D'	10	1
	35	17-SK37	F	2	B'	9	7
	36	17-SK38	D	10	C'	9	-1
	37	17-SK39	D	10	D'	10	0
	38	17-SK40	H	6	B'	9	3
	39	17-SK41	M2	7	B'	9	2
	40	17-SK42	K2	8	K'2	8	0
9年1組	41	17-SK43	M1	7	K'2	8	1
	42	17-SK44	M2	7	B'	9	2
	43	17-SK45	B	9	B'	9	0
	44	17-SK46	K2	8	K'1	8	0
	45	17-SK47	K2	8	J'	4	-4
	46	17-SK48	B	9	B'	9	0
	47	17-SK49	C	9	K'2	8	-1
	48	17-SK50	B	9	C'	9	0
	49	17-SK51	B	9	L'	8	-1
	50	17-SK52	B	9	B'	9	0
9年2組	51	17-SK53	H	6	D'	10	4
	52	17-SK54	K1	8	D'	10	2
	53	17-SK55	C	9	D'	10	1
	54	17-SK56	F	0	F'	0	0
	55	17-SK57	H	6	D'	10	4
	56	17-SK58	F	0	K'1	8	8
	57	17-SK59	F	0	D'	10	10
	58	17-SK60	F	0	F'	0	0
	59	17-SK62	C	9	D'	10	1
	60	17-SK63	G1	3	M1	7	4
9年3組	61	17-SK65	C	9	M1	7	-2
	62	17-SK66	D	10	D'	10	0
	63	17-SK67	C	9	L'	8	-1
	64	17-SK68	B	9	B'	9	0
	65	17-SK69	B	9	B'	9	0
	66	17-SK70	C	9	L'	8	-1
	67	17-SK71	K2	8	B'	9	1
	68	17-SK72	B	9	B'	9	0
	69	17-SK73	C	9	C'	9	0
	70	17-SK74	D	10	A'	5	-5

### 3. 調査結果

表1に2016年度の集計データ（有効データ72件）を，表2に2017年度の集計データ（有効データ70件）を示す。到達点は，「目標なし」（E，F，N，G1，G2，J，A），「計画なし」（目標はあるが計画なし）（H，I，B，K1，M1），「行動なし」（目標あり・計画ありで行動なし）

(M 2, K 2), 「行動あり」(目標あり・計画あり・行動あり)(L, C, D)である。なお、After時は「'」をつけて区別している。

表3に到達点を「目標なし」～「行動あり」の段階に応じて0点(E, E')～10点(D, D')を割り当てたものを示す。到達点Bは、計画がないが、目標達成のための行動を起こしていて、その行動の結果、思った通りに進んでいるので9点とした。

表4にはその点数を基に計算したBefore / Afterの差の割合を2年分で比較して示した。度数の比率が2桁になっている点数差1点～-1点前後でグループ化してみると、点数差2点

表3 到達点の点数化

	Before時の点数化		After時の点数化	
	到達点	点数	到達点	点数
目標なし	E	0	E'	0
	N	1	N'	1
	F	2	F'	2
	G1	3	G'1	3
	G2	3	G'2	3
	J	4	J'	4
計画なし	A	5	A'	5
	I	5	I'	5
	H	6	H'	6
	B	9	B'	9
	M1	7	M'1	7
	K1	8	K'1	8
行動なし	M2	7	M'2	7
	K2	8	K'2	8
行動あり	L	8	L'	8
	C	9	C'	9
	D	10	D'	10

～10点のプラスに上昇したグループが19.4%から30.0%となっていることがわかる。2017年度のほうが、やる気が上昇した生徒がやや多かったとも言えよう。

表4 到達点の点数差の割合

到達点の 点数差	2016年度		比率2	2017年度		比率2
	度数	比率1		度数	比率1	
10	-	-	19.4%	1	1.4%	30.0%
9	-	-		0	0.0%	
8	1	1.4%		1	1.4%	
7	0	0.0%		3	4.3%	
6	2	2.8%		3	4.3%	
5	5	6.9%		1	1.4%	
4	5	6.9%		5	7.1%	
3	1	1.4%		2	2.9%	
2	0	0.0%		5	7.1%	
1	13	18.1%		63.9%	7	
0	21	29.2%	19		27.1%	
-1	12	16.7%	12		17.1%	
-2	4	5.6%	16.7%	3	4.3%	15.7%
-3	3	4.2%		3	4.3%	
-4	1	1.4%		2	2.9%	
-5	1	1.4%		1	1.4%	
-6	1	1.4%		0	0.0%	
-7	1	1.4%		2	2.9%	
-8	0	0.0%		-	-	
-9	1	1.4%		-	-	
計	72	100.0%	100.0%	70	100.0%	100.0%

表5にクラス別に点数を集計して求めた平均値を示す。クラスでの平均値でもやる気の割合が上昇していることがわかる。ただ、2016年度の9年2組だけが平均値が下がっており、このクラスの状態に注意して示唆している。

表6に2016年度のBefore時の到達点の分布を、表7に同After時の到達点の分布を示す(MとKへの到達経路M1, M2, K1, K2の記載がなかったものはM, Kのままとしている)。特に「目標なし」の減少(19.4%から39.7%へ)が目立つが、「行動なし」「行動あり」も減少(13.9%から11.1%へ, 30.6%から27.8%へ)、逆に「計画なし」「計画なし/行動なし」が増加(18.1%から23.6%へ, 18.1%から27.8%へ)している。どの変化に着目するかは、指導者の解釈(イベント参加への指導内容と生徒の反応・行動など)に依存するが、従来、経験的に感じ取っていた生徒のやる気の変化の雰囲気を、数値データとして把握でき、指導者の気づきへの重要なヒントを与えていると言えよう。



表5 クラス別点数の平均値

クラス	2016年度					2017年度				
	Before		After		上昇/ 下降	Before		After		上昇/ 下降
	点数計	平均値	点数計	平均値		点数計	平均値	点数計	平均値	
9年1組	134	7.44	144	8.00	上昇	128	6.74	147	7.74	上昇
9年2組	127	7.06	115	6.39	下降	125	7.35	129	7.59	上昇
9年3組	147	7.74	147	8.16	上昇	144	7.58	157	8.26	上昇
9年4組	118	6.94	118	7.82	上昇	103	6.87	118	7.87	上昇

表6 2016年度 Before 時の到達点の分布

到達点の分類	度数	比率	度数	比率	
目標なし	E	1	1.4%	14	19.4%
	N	1	1.4%		
	F	0	0.0%		
	G	6	8.3%		
	G1	2	2.8%		
	G2	0	0.0%		
	J	2	2.8%		
	A	2	2.8%		
計画なし	I	2	2.8%	13	18.1%
	H	1	1.4%		
	B	5	6.9%		
	K1	4	5.6%		
	M1	1	1.4%		
計画なし/ 行動なし	M	3	4.2%	13	18.1%
	K	10	13.9%		
行動なし	M2	2	2.8%	10	13.9%
	K2	8	11.1%		
行動あり	L	0	0.0%	22	30.6%
	C	16	22.2%		
	D	6	8.3%		
総計	72	100.0%	72	100.0%	

表7 2016年度 After 時の到達点の分布

到達点の分類	度数	比率	度数	比率	
目標なし	E'	2	2.8%	7	9.7%
	N'	1	1.4%		
	F'	1	1.4%		
	G'	0	0.0%		
	G'1	1	1.4%		
	G'2	0	0.0%		
	J'	2	2.8%		
	A'	0	0.0%		
計画なし	I'	2	2.8%	17	23.6%
	H'	6	8.3%		
	B'	4	5.6%		
	K'1	5	6.9%		
	M'1	0	0.0%		
計画なし/ 行動なし	M'	1	1.4%	20	27.8%
	K'	19	26.4%		
行動なし	M'2	0	0.0%	8	11.1%
	K'2	8	11.1%		
行動あり	L'	0	0.0%	20	27.8%
	C'	12	16.7%		
	D'	8	11.1%		
総計	72	100.0%	72	100.0%	

表8 2016年度到達点の変化

時期	到達点の分類	After															総計	
		目標なし					計画なし					計画なし/ 行動なし	行動なし	行動あり				
		E'	N'	F'	G'1	J'	I'	H'	B'	K'1	M'	K'	K'2	C'	D'			
Before	目標なし	E																1
	N	1																1
	G		1								1	4						6
	G1									1				1				2
	J												1		1			2
	A													2				2
	計画なし	I					1								1			2
	H																1	1
	B					1		1	1			1					1	5
	K1								2					1	1			4
	M1							1										1
	計画なし/ 行動なし	M						1					2					3
	K			1			1	1	1			5			1			10
	行動なし	M2										1	1					2
	K2					1		1	1			1	3	1				8
	行動あり	C	1					1		2		4	1	5	2			16
D					1				1				1				3	
総計		2	1	1	1	2	2	6	4	5	1	19	8	12	8		72	

表8に2016年度のBefore時からAfter時への変化を到達点の分類で示した。着目すべきは、対角線下側の変化が後退した生徒である。例えば、行動ありC→目標なしE'に変化した生徒、行動ありD→目標なしG'1に変化した生徒には、個別に相談にのるなどのケアが必要と考えられる。このように、やる気度の低下を到達点ごとの変化で見るとは、丁寧な指導につなげることが可能になると言えよう。

表9に2017年度のBefore時の到達点の分布を、表10に同After時の到達点の分布を示す。2016年度と同様に「目標なし」「行動なし」「行動あり」が減少（24.3%から12.9%へ、12.9%から38.6%へ、28.6%から38.6%へ）しているが、「計画なし」が若干上昇（34.3%から40.0%へ）していることが読み取れる。これは、イベント参加の指導上で何か留意すべきことがなかったのかを気づかせてくれるデータとも言えよう。

表9 2017年度 Before 時の到達点の分布

到達点の分類		度数	比率	度数	比率
目標なし	E	4	5.7%	17	24.3%
	N	2	2.9%		
	F	1	1.4%		
	G1	5	7.1%		
	G2	1	1.4%		
	J	0	0.0%		
	A	4	5.7%		
計画なし	I	0	0.0%	24	34.3%
	H	5	7.1%		
	B	17	24.3%		
	K1	1	1.4%		
	M1	1	1.4%		
行動なし	M2	2	2.9%	9	12.9%
	K2	7	10.0%		
行動あり	L	0	0.0%	20	28.6%
	C	10	14.3%		
	D	10	14.3%		
総計		70	100.0%	70	100.0%

表10 2017年度 After 時の到達点の分布

到達点の分類		度数	比率	度数	比率
目標なし	E'	2	2.9%	9	12.9%
	N'	1	1.4%		
	F'	3	4.3%		
	G'1	0	0.0%		
	G'2	0	0.0%		
	J'	1	1.4%		
	A'	2	2.9%		
計画なし	I'	1	1.4%	28	40.0%
	H'	1	1.4%		
	B'	18	25.7%		
	K'1	4	5.7%		
	M'1	4	5.7%		
行動なし	M'2	1	1.4%	6	8.6%
	K'2	5	7.1%		
行動あり	L'	6	8.6%	27	38.6%
	C'	8	11.4%		
	D'	13	18.6%		
総計		70	100.0%	70	100.0%

表11 2017年度到達点の変化

時期	到達点の分類	After															総計	
		目標なし					計画なし					行動なし		行動あり				
		E'	N'	F'	J'	A'	I'	H'	B'	K'1	M'1	M'2	K'2	L'	C'	D'		
Before	目標なし	E	2								1						1	4
		N		1							1							2
		F							1									1
		G1							3		1						1	5
		G2									1							1
		A				1									1	1	1	4
		H									1		1		1		2	5
	計画なし	B			1		1	1	7		1		1	1	3	1	17	
		K1														1	1	
		M1												1			1	
	行動なし	M2							2								2	
		K2				1	1		1	1			1		1	1	7	
	行動あり	C			1					1	1		2	2	1	2	10	
		D					1		3					1	2	3	10	
総計		2	1	3	1	2	1	1	18	4	4	1	5	6	8	13	70	

表11に2017年度のBefore時からAfter時への変化を到達点の分類で示した。ここでも対角線下側の生徒に着目すべきである。例えば、行動ありD→計画なしB'に変化した3名の生徒は、イベント参加前に考えていた計画内容が、実際にはうまくいかなかったのかなど、指導すべき生徒を浮き彫りにしているデータだと解釈することができよう。

#### 4. 考察

SIS中等部・高等部の場合、学園祭前の1週間は「不思議ウィーク」というイベントが行なわれる。学園祭を盛り上げる意味合いを持ち、生徒会が主体になり開催される。それゆえやる気度は、低学年ほど高く出る傾向がある。また、この学校はすべての勉学も生徒に任されていて、学園祭後もすぐに学校中が平常心に戻る。筆者（増尾）は毎年、イベント直後には教科の試験を日程に入れている。理由は、やる気度が高まっている生徒が多く、そのやる気度は、勉強に移行しやすいと感じているからである。とりわけ今回調査対象としたNIEを受講しているクラスでは、普段から総合的な学習の時間も意識した授業展開（問題発見、問題把握、問題解決、結果の発表、結果考察）を実践しているので、ポジティブ思考の生徒が多い場合は、良い方向にクラスを引き上げることが可能である。

学習指導要領に沿って行なう学園祭など文化的行事の位置づけは、平素の学習の成果を発表し、その向上の意欲を一層高めたりすることが目標である。今回行なった調査から得られた結果のようにやる気度をデータ化して把握することで、中学生の教育活動に活かせる試みができたと、やる気度の高い状態を活かし、テスト勉強に移行させる可能性も見えてきたと言える。

この「Before / After型やる気度調査法」を実施するにあたり、「やる気度とは何ですか？」との質問を受けた。もちろん当然のことである。そこで、心理学の用語でレジリエンス（resilience）という言葉に近い意味を持つので解説した<sup>7)</sup>。この言葉は精神医学・物理学また災害対策でも用いられている。心理学におけるレジリエンスは「ストレスや不利な状況などから、それに対応しては克服していく能力のこと」である。直訳すれば「(どんな困難にも)くじけず・負けない」ことである。ポジティブ思考のことである。

この言葉の意味と今回の調査を踏まえて、自分のやる気を見つけて欲しいと投げかけもした。「Before / After型やる気度調査」はこの3要素「(どんな困難にも)くじけず・負けない」をやる気度からも推測が可能な手法を示唆しているとも感じている。これは、ハーディネスの高い人は低い人に比べ、ストレスフルな出来事を経験してもそれを肯定的に認知し、自分でコントロールできるものであると考えることができることからわかる<sup>8) 9) 10)</sup>。

#### 5. おわりに

2016年と2017年にわたり調査する中で、それぞれの調査時の個々の関心・意欲・態度がまさに観点別評価のごとく知りえる利点があった。今回は特にイベントに対する到達点とその度合いを確認できた。到達点が低い生徒にはイベント後の授業の改善や心理的支援などを行なうための参考資料にこの調査結果を応用できることがわかった。特に、考察でも述べたがイベント自体がストレスと受け取ることもあり、これはイベント中やイベント後での生徒からの感想などでも把握することができた。そして、この調査後にやる気度のためのハーディネスを授業に含めた授業



支援をすることで、日常のコミュニケーションにおいて生徒らのポジティブな反応が得られた。

今後は、調査結果を十分に把握して、やる気度の高いままで教育支援やテスト勉強に移行させ、高いやる気度をできる限り持続させることが課題でもある。

#### 謝辞

本研究は、JSPS科研費・基盤研究(C)15K01045（代表：横山宏）の助成を受けたものです。

#### 参考文献

- 1) 石桁正士, ハイテクリサーチやる気研究会, “「やる気」の管理学”, 講談社(1988).
- 2) 石桁正士, やる気研究会, “やる気の人間学”, 綜合法令(1998).
- 3) やる気研究会, “やる気の人間学”, 日刊工業新聞社(2008).
- 4) 横山宏, 後藤由美, 富島磨由美, 増尾美恵子, “ワークショップ：生徒・学生に秘められた「イベントのやる気度調査」”, 情報コミュニケーション学会第12回情報教育合同研究会研究報告, Vol.13, No.3(2016-03), pp.18-19.
- 5) 増尾美恵子, 後藤由美, 富島磨由美, “イベントにおける生徒・学生のやる気の心理的考察”, 情報文化学会2017年度近畿支部研究会発表論集, pp.1-8.
- 6) 文部科学省:『中学校学習指導要領』, 第5章特別活動, 文部科学省(2008), pp.107-110.
- 7) 枝廣淳子, “レジリエンスとは何か”, 東洋経済新報社(2015), pp.56, 57, 58.
- 8) 田中秀明, 桜井茂男, “大学生におけるハーディネスとストレスサーおよびストレス反応との関係”, 鹿児島女子短期大学紀要, 41(2006), pp.153-164.
- 9) Kobasa,S.C. , “Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness” . Journal of Personality and Social Psychology, 37 (1979), pp.1-11.
- 10) Kobasa,S.C.,Maddi,S.R.,& Kahn,S., “Hardiness and health: A prospective study” . Journal of Personality and Social Psychology, 42(1982), pp.168-177.